地域の公園には小さな子どもたちから高齢者まで、老若男女が集う（大阪・鶴見緑地）

編集後記
From Editor

少子高齢社会を展望すると、少々暗い気持ちになる人も多いだろう。社会に重苦しいものが積み上がっていくようなイメージ。国力が衰え、社会不安が広がっていく…。しかもその高齢者とは、遠くはない未来の自分。

将来の社会の姿が見えない中で、ではどうやって自分たちの生活の質を充実させていくのか。もちろん、幸せは人から与えられるのではなく、自分で見いだしていくべきものである。見つけるべきはその人自身の尺度。人間性の豊かさが問われることにもなりそうだ。

高齢社会化の進展の中で、手を拱いて悲観論に浸るより、これからの時代、高齢世代を中心に、人々が地域に大いに貢献する社会を想像してみるのはどうだろう。現にいま、一斉に定年を迎えている団塊の世代などには、その役割が大きく期待されている。

個人差は大きいが、実際高齢になってからでも新しい能力を高めていく人は少なくない。例えば、一から外国語を勉強し、やがて海外からの来訪者のガイドを務めるなどして、活躍の場を見いだしている方もいる。また、新たなコミュニティ・ビジネスに取り組む人たちも出てきた。

欧米の社会では、だれもが、仕事と家庭、そして地域コミュニティという3つの居場所をもつという。一方、日本の特に都市部では、地域とのかかわりが乏しい人が多い。しかし、これからは、高齢者に限らず、大人たちがまちに出て、地域づくりに参加するような未来像を考えていきたい。というのも、それが持続可能な地域づくりの基盤にもなりそうだからだ。そこには、もちろん世代間での協働の意識が必要だが、それぞれの視点から、新しい時代の生活価値を見いだしていけばよい。

今号の鼎談の中で植田和弘氏は、持続可能な社会について、定常性をもった、変わらないというイメージではなく、実は「生活の質を大切にしながら技術ではイノベイティブに新しい状況に適応していく能力を持つ社会」であると語っている。そして、自分たちのまちを大切に思い、まちづくりに取り組むことが、持続可能性そのものだと指摘する。

世代を問わず、そのような社会づくりに向けてこれからどう貢献していくのか。それにしなやかに対応していくためには、未来に向けた想像力が重要になるだろう。

――京　雅也

表紙写真　秋の気配が漂う神戸・六甲山山頂にある牧場。間近で羊とふれあうのは子どもたちにとっては初めての体験
裏表紙写真　大阪・京橋、行き過ぎる人波の中で路上演奏／大阪近郊にある鶴見緑地の池のほとりで魚とり／休日の夕方、大阪・中之島公園のバラ園を散策する人たち

CEL 90号　特集 ■ 現代生活者の住まい・生活観 2009-持続可能性と生活満足　発行●平成21年10月1日　頒価1,000円（送料別途）

■発　行　大阪ガス(株) エネルギー・文化研究所（CEL）
〒541-0046　大阪市中央区平野町4-1-2
■発行人　多木秀雄 *Hideo Taki*
■編集人　京　雅也 *Masaya Kyo* / 弘本由香里 *Yukari Hiromoto*

編集●関西ビジネスインフォメーション(株)内　CEL編集室
〒530-0005　大阪市北区中之島3-2-18
住友中之島ビル7F　TEL.06-4803-2307

印刷・製本●日本写真印刷株式会社

RESEARCH INSTITUTE FOR CULTURE, ENERGY AND LIFE © 2009 OSAKA GAS CO.,LTD.

禁無断転載複写
※本誌掲載の寄稿文、インタビュー、レポートなどの内容は必ずしも小社の見解を表すものではありません。
本誌・バックナンバーのコンテンツや当研究所の活動内容はインターネットホームページ〔http://www.osakagas.co.jp/company/efforts/cel/〕でご覧いただけます。

本誌に関するお問い合わせ、ならびにご購読申し込みや送付先変更等のご連絡は　CEL編集室　Tel.06-4803-2307 Fax.06-4803-2210 cel@kbicom.net まで